第Ⅳ部門

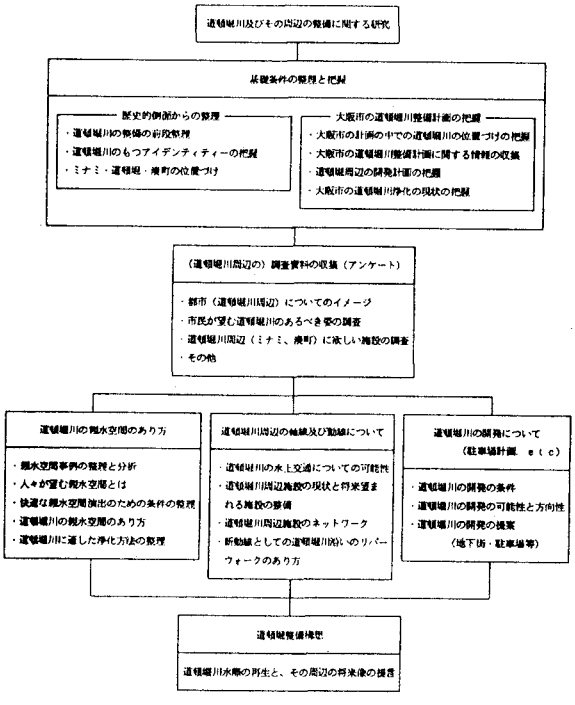
都市地域における新しいタイプの開発コンセプトと構想案のプロポーザル策定方法に関する研究

立命館大学　正　員　春名　攻
株式会社　長大　正　員　○山下　正章
前田建設工業株式会社　正　員　余部　喜代治
立命館大学大学院　学生員　三好　浩樹

1．はじめに

現状の都市整備計画策定においては、公の場（コンペション等）において、受注元が発注者を指名し、その時点から、発注者側と受注者側とで当該地域における整備計画方針や具体的な計画案を策定していくケースが多く見られる。しかし、この方式では、コンペションに参加できないと整備計画その他について関与できないといった、閉じられた性質も同時に持ち合わせていると考えられる。

そこで、本研究では、上述したことを勘案して、受注者，発注者および当事者といったことに関わらず、対象地域において問題点の分析や整備方向の検討をおこない、これらを１プロポーザル案としてとりまとめて提言する方法をとりあげる事とし、対象地区として大阪ミナミ地区を選定して実証的検討を試みた。



図－１　研究の進め方フロー

今回対象地として選定した大阪ミナミは、関西国際空港の開港に伴い湊町にＣＡＴが建設されるなど、国際都市大阪の玄関口としての役割を担っていくものと考えられる。また、湊町地区総合整備計画の他にも長堀改造計画や難波地区再開発なども進められ、今後地域の内容も大きく変わろうと動き出している地域でもある。

このように国際化，高齢化，余暇時間の拡大，等々の経済社会潮流の変化の中、大阪「ミナミ」をとりまく社会的環境や都市構造は急変しようとしている。従って、「ミナミ」においては、これから始まる新世紀へのプロローグとなる新しい都市づくりの潮流を的確に捉え、２１世紀の魅力ある都市づくりの先導的役割を果たす計画づくりをおこなう必要があると考えた。そのためには、大阪市民の誰もが最も「大阪らしい」と感じる道頓堀及びその周辺を、将来にわたって「ミナミ」のシンボル地区として整備することが不可欠であると考えた。

このようなことから、大阪ミナミの顔ともいえる"道頓堀川"の水辺開発の方向性に重点を置き、表－１に示すような研究会を構成して、アンケート等の実証性を考慮しつつ、多角度からの検討を重ねた。ここに、その結果をまとめ報告するものとする。

2．研究方針

本プロポーザル案の作成に際しての、研究の進め方のフローを図－１に示す。

表－１　本研究会構成メンバー表

座　長	春名　攻
前田建設工業（株）	余部　喜代治 黒木　淳 稼農　稔
（株）長大	山下　正章 母倉　修
立命大　春名研究室	三好　浩樹 北岡　英基

Mamoru HARUNA, Masaaki YAMASHITA, Kiyoji AMABE, Hiroki MIYOSHI

研究に際して必要な基礎的情報と考えられる「歴史的側面からの整理」，「大阪市の道頓堀川整備計画の把握」をおこなった上で、「道頓堀川の親水空間のあり方」，「道頓堀川周辺の軸線及び動線について」，「道頓堀川（及び周辺）の開発について」の３視点から整備方向の研究をおこなっていくこととした。

このような流れにおいて、研究にあたって必要と考えられるいくつかの情報のうち、対象地の現況の分析及び情報の抽出を目的として、アンケートを作成，実施した。これは、「現代社会におけるニーズ」という大きな枠に着目すると共に、大阪を生活の拠点とする来街者の生の声によって求められる環境を導き出すということが重要となり、その声を生かすことにより、求められる「ミナミ」の多面的な表情を創出することが可能なのではないかと考えた。

さらに、これらをふまえて「ミナミ」の全体像の中から、今求められているアメニティ性の高いやすらぎの場として"道頓堀川"をクローズアップし、憩いの場としての検討をおこない、さらに大衆芸能発祥の地である「ミナミ」の庶民性及び情緒的良さを守り、生かすことでその独自の芸能文化の復興を目指した。

また、本研究において、"道頓堀川"に特価した研究の視点を設けた理由を以下に挙げることとする。

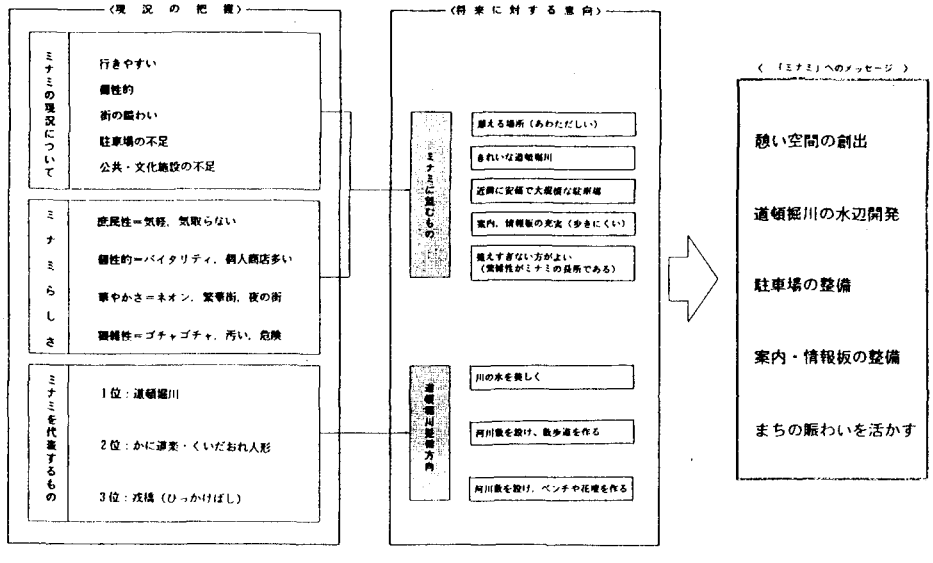
①現在、大阪市内をはじめとする各地域において、ベイエリアの様々なプロジェクトが進められており、これに伴いリバーフロント整備も盛んになっている。このような水辺のメリットを生かし、環境の向上を図ることで、地域の振興を目指すことが可能であると考えられる。

②もともと、人々にとって川が持つ意味は、時代によって変化してきており、あるときは方位を決める要素であったり、またある時は水運の手段であったりした。しかしこうした意味が薄れつつある現代都市の川については、別の意味を見出す必要があると考えられる。その意味においても、また、「水の都」大阪の再生という意味においても、国際都市大阪にふさわしいリバーフロントづくりが必要と考えられた。

これら調査により得られた結果を元に、開発コンセプトを抽出し、様々な視点から実際的な開発イメージを作成した。

3．検討結果と考察

今回の提案にあたり、マスメディア等から社会的ニーズの方向性を読みとり、さらに平成５年秋には独自のアンケート調査をおこなって、その結果から抽出されたものを取りまとめた。以上の経過から得られたアンケート結果と、その他調査からの、全体コンセプト抽出の過程を図－２に示した。



図－２　各調査からのコンセプト抽出過程

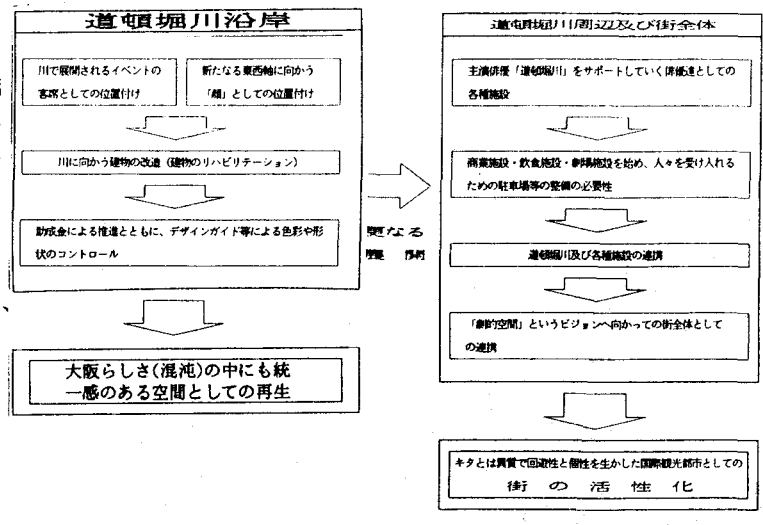
すなわち、現状のミナミについての評価は、「充実したものに対する高い評価」と、「欠如しているものに対する大きな不満」という両極端な評価で構成されていた。また、「街」として施設の充実以外で重要な一要素である「街の雰囲気，個性」については、「新しさ」は感じないにせよ、「最も大阪らしい街」という評価に代表されるように、地に根を下ろした魅力があることが推定された。このことを街の様子と併せ考えると、個人商店が多く様々な種類の店があり、これらが不統一に面的に広がって存在することから、街全体の回遊性を生み出していると考えられる。また、これが同時に外部の人に対しての分かりにくさにつながっていることも伺える。しかしながら、その分かりにくさが一種の期待感を持たせ、目的無く来街した層に対して回遊性を生み出している一面も伺えた。

また同時に、対象地における開発に対して、それが現状の魅力をスポイルしてしまうことを危惧する声が多々聞かれた。

このような事を併せ考えると、ミナミの再開発を考えた場合、いたずらに開発をおこなえば、現状のミナミの良い点も同時に破壊しかねない危惧が生じた。また、仮に計画者が何らかの開発をおこなったとしても、それが現状の大阪のルールといったものと大きく食い違ったものであれば、期待通りに機能する保証はなく、大阪らしい、いい意味で裏切られた使い方をされる可能性もあると考えられた。このようなことから、計画する際にあらかじめ用途を限定するような整備ではなく、各人各様に使用できるような柔軟性を持たせた整備を行っていくことが必要であると判断された。　また、ミナミについてその歴史を整理すると、①大阪が古来より日本の文化の中心の１つに数えることができること，②かつて歌舞伎・浄瑠璃・文楽などはいずれも地方に発祥し、一度大阪に集められ、成熟を経て各地へ広がり、日本を代表する伝統芸能となっていったこと，等々がその大きな特徴として挙げられると考えた。

２１世紀の国際都市大阪という観点からグローバルな視野を持ってこれらを併せ考え、さらにアンケート結果から「ミナミ」の現状として抽出した"憩いの空間"と"大衆芸能の復興"の融合を勘案した結果、今回、開発コンセプトを「劇場空間」として定め、"道頓堀川"を『劇的空間』の中心と捉えることとした。

具体的な方向性及び内容については、紙面の都合上割愛するものとするが、この提案内容がトリガーとなり引き起こされる効果について取りまとめたものを図－３に示した。また、今回、整備の１つの方向性として色彩に着目してシミュレーションをおこない、"道頓堀における憩いの空間"についての検討を行ったものを図－４に示す。このような検討を重ねていくことで、大阪ミナミにおける整備計画に対する提言へとつながり得ると考えている。



図－３　本提案内容から生じる効果整理図

４．検討結果の取りまとめ

本研究は、基本的に過去から現在に至る「ミナミ」を捉え、大阪を代表する都市のあり方について、現在進行している周辺プロジェクトの動向等もふまえ

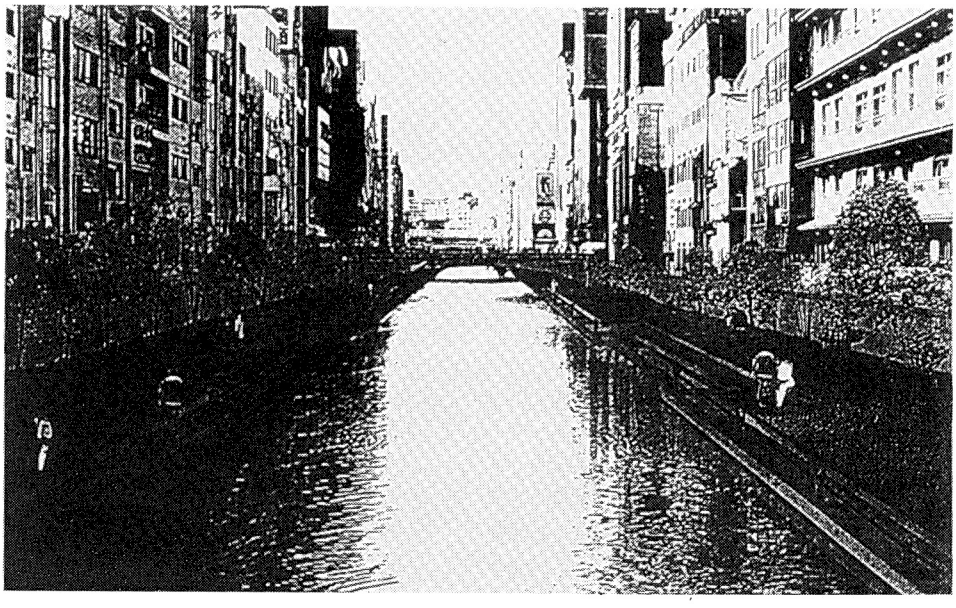
た中で、今後どのような都市づくりが必要であるのかということに視点を置き、『道頓堀　劇的空間構想』を提案したものである。

しかし、この構想の実現を図るには、いくつかの課題が挙げられる。これら課題のひとつひとつについては検討を加え、提案現実化を高めていく必要があると考えられる。例えば、部分的に道頓堀川を埋め立てたり、水上に人工基盤を設けること等が挙げられる。これについては河川管理者と充分な協議の上進められる必要があるが、流下能力の確保や水位調整を行うこと、また、人工地盤の形成についても、河積に影響しない程度（例えば、道頓堀川の拡張部は既設橋脚の線上にのみ指示杭を打つ）の構造にすること等が対応策として考えられる。

このような数々の課題をクリアーする事で、「道頓堀川」がいわゆる都市の路地空間としての存在だけでなく、憩える空間して、さらに回遊の出発点として認識されるものと考える。その結果、周辺を巻き込んだ形で開発計画が展開され、周辺の商業施設が活性化し、大阪市「新総合計画２１」で位置付けられている都心のシンボルゾーンの形成が推進し、大阪「ミナミ」を中心とする東西軸の形成がより一層強化され、商（文化）環境の実現の一助となれば幸いである。

【参考文献】

1). 大阪市，「大阪市総合計画２１」，大阪都市協会
2). 大阪都市住宅史編集委員会，「まちに住まう大阪都市住宅史」，平凡社
3). 川端　直志，「ウォーターフロントの時代」，都市文化社
4). 阪急電鉄文化・技術研究所，「キタ・ミナミの比較分析研究」
5). 大阪市，「大阪市主要プロジェクト集(93年度版)」，大阪都市協会
6). 大阪市，「季刊ＳＯＦＴＯ」，大阪都市協会
7). 土木学会海外活動委員会，「建設プロジェクトの分析と評価」，土木学会
8). 日本建築学会，「建築・都市計画のための調査・分析方法」，井上書院
9). 牧　英正，「道頓堀川裁判」，岩波新書
10). 石田　頼房，「日本近代都市計画の百年」，自治体研究社



図－４　シミュレーション結果により作成したカラーデザイン案
（株式会社　島精機の技術支援を得て、HYPER-PAINTにより作成）